

沢マンアートコラム

独尊的な、あまりに独尊的な

Written by Shintaku Tomoni

第4回「痛くてイタくてたまらないアート」

どうも、ご愁傷様です。間が空きましたのでお忘れの方もいらっしゃるかと思いますが、ぼくです。しがない美術家(笑)の新宅です。とりえず唇の上では梅雨ですので、徹底的にじめじめして、梅雨を満喫したいと思います。というわけで早速、ハアハアハア。いえ、喘いでいるのではなく溜息です。じめじめするならばまずは定番の溜息からでしょう。

しかしせっかくならハアハア言ってみて、今回は見ていると思わずハアハアしてしまう、もしくはどう見てもハアハア言っているアーティストをご紹介します。え、展開に無理がありますか？ あなたね、そんなこと気にしてるからいつまで経ってもうだつのがあがらない低所得層なんですよ。ほら、第三のビールばかり飲んでないで、黙ってハアハア言ってみなさい。さあ、ハアハアハア。そう、ハアハア、いいよ、ハアハアだよ、OK、ハアハアハアハアって、書き過ぎてちょっとグシュタルト崩壊してきました。

長々と失礼いたしました。それはともかく、ハアハアでまず思い浮かぶのは、中国の美術家、何雲昌（フー ユンチャン）（1967・）です。中国パフォーマンスアートの第一人者とされていますが、彼のやっていることはどう控えめに見てもパフォーマンスという範疇を逸脱しています。もっとも有名なのは、自らの肋骨を切除するという作品です。なんてさらっと説明しましたが、理解できますでしょうか。これは、麻酔なしで、太ももから胸部にかけてを大きく切開し、そして肋骨を一本切除し、それをネックレスにしたというものです。

ぼくも結構な変わり者だと自負しておりますが、とても敵いません。いや、そもそも競う気にもなりません。痛いのは無理です。彼はこの行為について、あるインタビューで次のように答えています。

「もっと自分の思いを忠実に表現していこうとして、そういう要求が高まった結果、苦痛になっていくわけです。苦痛は忠実さの結果にほかなりません。～中略～ 中国はあまりにも現実的すぎます。そういう中で超現実でありたい」

おまえのやっつことは意味が分からん！と喝破するつもりが、素直に納得してしまいました。「超現実」。これはシュルレアリスムの時代よりもなお、現代において非常に重要なキーワードになっているのではないのでしょうか。そう、中国に限らず、現代はあまりにも“現実的過ぎる”のだと思います。意味があること、価値があること、説明可能なこと以外はできないのだとしたら、それは意欲しさ以外の何ものでもありません。人間の生は無意味の内にこそ存在するのですから。

次に、このような“痛い”パフォーマンスアートの創始者とも言える、現代美術家クリス・バーデン(1946・)をご紹介します。彼の代表作は「Shoot (1971)」。これは、観客の前で助手に自分の腕を銃で撃たせるというパフォーマンスです。他にも悪名高いパフォーマンスが多数あり、フォルクスワーゲンに自らの身体を礎にし（撃は本当に車体に釘づけされている）、ロサンゼルスの中を走り回ったりもしています。ここまでくると、もはや言葉もありません。

言葉を失いましたのでもう語ることはないのですが、ダメ押しとして、顎を外れるほどのアーティストを紹介してオチをつけるとしましょう。ロシアの“自称”パフォーマンスアーティストのピョートル・パヴレンスキー（1984・）です。彼をネットで検索してみると、所属ギャラリーやアーティストとしての実績らしき情報が出てこないの、“自称”というのはそういうことなのかもしれません。それはさておき、彼は、ロシアにある有名な赤の広場、そのレーニン廟の前で素っ裸になり、ちょうど体操座りの形で座しました。そして、石畳に自らの睾丸を釘で打ち付けたのです（言うまでもなく逮捕されました）。想像するだけでも、私の股間が恐れおののきびりびり痺れてくる気がいたします。

それにしても、いったいなぜ、彼らはこれほど痛い、もしくはイタイ行為に走るのでしょうか。それぞれ作家の語る（騙る？）コンセプトはあるのでしょうか、しかし、それ以前の話のような気がします。よく言われるように「アートとは疑問を投げかける行為である」ので、どんな種類のアートにしろ明確な答えというものは無いのでしょうか。しかし、私がクリス・バーデンを知ることになった書籍に、ひとつの答えらしきものがありましたので、ご紹介したいと思います。

【パフォーマンス・アートの目的は、作家によって異なる。しかし煮詰めれば、芸術鑑賞という感情の安全地帯から鑑賞者を引きずり出して、アートを生命との境界線ギリギリまでもってこるといふ危険な作業に、私たちひとりひとりを巻き込もうとしていることだといえるだろう。】

もっともらしいことを言うてはいますが、ふつうの感覚で見れば、「呆れた」「意味がわからない」「度を越した芸人みたいなものじゃないか」というところでしょう。しかし、私見では、この手の表現はこれからの一層の有効性を獲得するだろうと思います。現代社会、特に物質的に飽和状態にある先進国においてこそ、いよいよパフォーマンスアート（もしくはボディアート）は意味を持つ。なぜなら、心の時代と言われて久しい現代は、観念の時代、つまり、頭ばかりが肥大化した時代だからです。そこにおいて、肉体は置き去りにされているのです。それが、このようなアートに接することで、半ば強制的に自らの肉体を意識することになる。痛みとは何か、肉体とは何か、行為とは何か、それはそのまま、生と存在という、人間にとって不可避の命題に連なるものであります。

余談ですが、頭と肉体について論じる時、必ず思いつく、ある本で読んだ逸話があります。オウム真理教の話です。なぜ、あれほど高学歴の優秀な頭脳をもった人たちが入信するに至ったのか。それは、頭ばかりで生きてきた彼らにとって、麻原の空中浮遊（それがインチキだとしても）などに見る人間の肉体は、素直に驚きであり、それゆえに感嘆し、尊敬し、崇拜の対象にまでなったというのです。

もちろん、この論に是非はあるでしょうが、私は支持したいと思います。ふつうに考えて、「頭だけ」「肉体だけ」というような状態は不自然極まりないのです。パフォーマンスアートは、稀薄化の一途を辿る我々の肉体というものを、否応なく思い起こさせてくれる貴重な存在ではないでしょうか。

201406031554